

佳作

## 命の尊厳

茨城県 茨城県立下館第一高等学校一年 佐藤 真優

今年私の家は、曾祖母が初盆だ。私自身今でもあまり実感が無い。しかし、今家では初盆に向けて、準備が進んでいる。初盆の一週間前からずっと掃除の日々で騒がしかった。なので、着々と実感が湧いた。そんな曾祖母との思い出を話していこうと思う。

私が曾祖母と話した記憶は三歳の時、今でも覚えていることがある。それは一緒に風呂に入ったことだ。あまり覚えていないがその頃は、毎日一緒に風呂に入っていたと母が言う。その時いつも曾祖母は湯ぶねに浸かりながら言う。

「戦争は絶対にしてはいけないよ。」

その時はまだこの言葉がどれだけ重くて大切なことだったなんて、思ってもいなかった。私ははじめ曾祖母の歯が入れ歯だったことについて聞いた。

「どうしておばあちゃんは、歯が取れるの？」

すると、

「歯が磨けなかったからかねえ。」

しあまり後悔はしていない。デイサービス生活になる前家族全員で見送りをしたからだ。一人一人ハグをして、「ありがとう。」

と言って見送りをした。おばあちゃんは少し悲しい顔で、「みんなありがとうな。」

と言っていた。その時私は何も言わずハグをしたら、おばあちゃんが、

「まひろ、がんばれ。」

弱弱しい声でこう言った。なんで分からないが感情もなく、うるっとしてしまった。なんでもできる気がしてきた。認知症であるためきっとデイサービスに行ったら、私たちのことは忘れてしまうのだろうと思うと少し悲しかった。

デイサービスに通って一年。おばあちゃんの体調が悪くなっていった。いつ亡くなくてもおかしくないと言われた。その時私は受験生であったため、あまりおばあちゃんのことを思っていなかった。その後受験に合格し、高校の入学式が終わり落ち着いた頃、突然おばあちゃんが亡くなったという電話がきた。皆覚悟はしていた。少し失礼に当たるかもしれないがおばあちゃんは忙しいのを分かって、亡くなるのを少し待っていてくれたのかなと思っただけ。亡くなったのは深夜でコロナの影響もあって、最期に会うことができなかった。けれど亡くなって家におばあちゃんが来たときデイサービスの人が、

と言う。正直その時は、何にも感じなかった。今考えるとこれも戦争の苦しさを教えてくれたのだなと思う。そのほかにも色々好奇心があった私は、たくさんのお話を聞いた。

「ご飯はなにを食べていたの？」

と聞くと、

「ご飯なんてないよ、育てていた野菜をずっとしゃぶぶっていたねえ。毎日同じものをずっと食べていたよ。でもまだ食べられるだけ良いほうかな。」

この言葉を聞いてその当時の私でも、びっくりした。一日三食当たり前のように食べているご飯がないのだ。他にも、

「洋服は何着たの、家族で亡くなった人はいる、どこで暮らしていたの？」

様々なことを聞いた。その質問におばあちゃんは嫌な表情一つせず、優しく丁寧に答えてくれた。その時は明るく私に話していたが実際はとても苦しかったのだろうと思う。おばあちゃんとお風呂に入ると、話題は大体戦争のことだ。そのことから中学生の時から、戦争に興味も出てきて、色々な戦争について調べるようになった。これが戦争をこれから起こさないようにするためなのだ。と今になって実感している。

私の曾祖母は今年の春に亡くなった。その二年前からデイサービスにいたためあまり話していなかった。しか

「『私は幸せもんだ。こんなにすごい家族に囲まれて、死んでも線香くれるのでもん。こんな嬉しいことはないよな。みんな頑張っているのでもん』と言っていたよ。」

と言っているのを聞いて、「よかった、元気だ」と思った。顔も今までにないくらい笑顔で素敵な顔だった。手を握ったとき少し温かく体温を感じることができたのも、嬉しかった。こうやって人はいろんなことを伝えて残してこの世を去るのだ、上手く言えないけど改めて命の尊厳を感じることもできた。これから辛いことがあると思うが、そんな時おばあちゃんがいつも言ってくれていた「がんばれ」。この言葉を胸に頑張ってみようと思う。たとえこの世にいらなくてもなぜか繋がっている気がする。今年のお盆はたくさん考えさせられるお盆になった。